

秋田県
退職校長会

会報

題字 秋田師山書（秋田市会員）

第 92 号

秋田市手形学園町1-1
秋田大学教育文化学部
同窓会旭水會 内

平成31年3月23日 発行

秋田県退職校長会



「なまはげ」について

秋田県退職校長会副会長 佐藤 磯 男

昨年、日本各地の「来訪神・仮面・仮装の神々」が、ユネスコの無形文化遺産に登録されました。「なまはげ」は、その中では代表的なものであると思います。「なまはげ」は、男鹿半島一帯で行われていますが、その起源は、「漢の武帝説」、「修験者説」、「山の神説」などがありますが、はっきりしたことは分かりません。元々は「来訪神」であったものが、いつの頃かは定かではありませんが、「鬼文化」の影響を受けたようです。仮面も、ほとんどが角のあるものになっていますが、角のないものを使っている地域もあります。

「なまはげ」は小正月行事として、江戸時代には、旧暦の一月十五日に、明治になってから新暦の一月十五日に行われていましたが、第二次世界大戦後に正月行事に組み込まれ、大晦日の実施となりました。「なまはげ」のなり手も、昔は独身の青年でしたが、今は、人口減少で壮年の男子もがんばっています。

「なまはげ」は、本来、年一回、家に訪れ豊饒や幸福をもたらす神でしたが、近年、子供に対するしつけ教育が主たる目的になっています。私が子供の頃の「なまはげ」は、理屈抜きで怖い存在で、大晦日の頃になると、「何処に隠れるか」、親や友達と真剣に相談したものです。当時の「なまはげ」は大声で部屋の中を歩き回り、押入なども開けて、隠れている子供を引っ張り出して、「親の言うこと聞くか」、「勉強するか」、「お

手伝いするか」などの言葉で脅し、「言うこと聞くので、ごめんしてください」と言うまで責め続けました。この恐怖体験がトラウマとなつて、大晦日以外の日でも、「なまはげに來てもらおう」と言われると「シュン」となったものです。近年は、屋内に上がらず、玄関で足踏みと雄叫びあげて終わる地域が多くなっています。そして、最後に「がんばれよ」と子供に声をかけて帰ります。中には、餅を置いて行く所もあります。なまはげの帰つた後、我が家の孫たちは、異口同音に「少し怖かったけど、楽しかった」と感想を話しています。このように、私の子供の頃に比べて、「なまはげ」の動きが穏やかになっています。「なまはげ」は、その時々々の社会情勢に巧みに対応して変化しています。「なまはげ」は年一回の伝統行事ですが、近年、伝承館などで、伝統的な作法の実演を見ることができるようになりました。男鹿以外の方々に「なまはげ」を理解していただくとともに、伝統保存の観点からしても良い試みであると思います。ユネスコの無形文化遺産に指定されたことで、注目されていますが、行事に関わる人が減り、仮面や衣装などを外注しなければならぬ地域もあります。年一回の、しかも、冬休み中の地域行事ですが、今以上に、学校の「ふるさと学習」等で、子供たちの関心を高める手立てを講ずることも肝要かと思えます。

平成最後の年に古希を迎え、これからの人生をいかに楽しく有意義に過ごすかと考えていた矢先、体調を崩し約一月半病院通いをした。風邪から始まって薬疹・背中の痛み・両手のしびれが主な病状であった。皮膚科、神経内科、整形外科へと受診したが、受診して気づいたことは、皮膚科は別として、神経内科でのしびれの診察では、筆の穂先やとがった器具によるわずかな触診はあったものの、背中への触診はされなかった。

次の整形外科では、すぐに検査と称してレントゲン撮影、そして写真に基づく診断と続いたが、やはり患部への触診は行われることはなかった。かつては内科であれ、整形外科であれ、医師自身による丁寧な問診や聴診・触診が必ずあったものだが、いつの間にかそれが消えてしまっていた。

確かに昨今の医療機器は優れ、色々な病気の原因を突き止めてはくれるものの、中には機器に現れないものもあるだろうし、そんな時、問診・聴診・触診という自分の肌を通して得たデータと、検査データを見比べながら診断してくれたところに、患者との信頼関係が構築されて来たと思う。現代医学では患部の確かな情報源として、また医療全般の効率化を図るためにも先進医療機器の活用が必要

ひょうたん



「からだ(体)」を通して
学べる教師を！
秋田県退職校長会
副会長 高橋 俊一

であろう。しかし、診察方法が時代と共に変わってきて、医師としてからだを通して身に付けるべき診察・診断といった基本的な医療活動が軽視されてきているのが残念である。

このことを教育に当てはめた時、データ頼みの教育では教育が成り立たない。教師と児童・生徒がそれぞれにからだを通して触れ合い、心を通じて初めて教育が成り立つのではないか。本県が全国学力テストにおいて、十一年連続で全国トップクラスの成績を維持している背景には、児童・生徒たちと教師

との良好な信頼関係が大きな基盤になっている。

その上に望ましい生活習慣や学習環境づくり、児童・生徒一人一人へのきめ細やかな指導と授業改善、学校と家庭・地域との連携など、関係者一同が一体となつて取り組んでいるがゆえにその成果が表れているといつてよい。働き方改革や大量退職に伴う若年教師が増える中、課題の多い教育現場ではあるが、教師一人一人がからだを通して実践感覚を養い、児童・生徒との触れ合いを通じた教育を大事にして欲しいと願っている。「医者も教師も選ばれる時代が来る」と言つて諭してくれた院長先生がいたが、正にその通りの時代を迎えているように思う。

県事務局だより

事務局長 長 澤 公 生

今年度実施した主な事業

4・19 平成29年度監査 協働大町ビル

5・10 県理事会・総会 協働大町ビル

6・11～12 全連退理事会・総会 きゅりあん

6・18 東北地区退職校長会協議会

秋田大会一次案内発送

7・7 郡市会長・事務局長合同の会

7・30 東北地区退職校長会協議会 協働大町ビル

秋田大会二次案内・来賓案内・講師話題依頼の発送

全連退会報第206号、県会報91号の発送

10・18～19 第46回東北地区退職校長会連絡協議会秋田大会兼第40回秋季研修大会

秋田ビューホテル

1月末 東北地区情報第11号発送

5月頃 賀詞を各郡市事務局へ発送予定

※他に全連退からの調査報告等を行っている。

東北大会特集

第46回東北地区退職校長会協議会秋田大会
兼第40回秋田県秋季研修大会報告

今年度の東北地区退職校長会協議会は秋田県で開催され、秋田市の秋田ビューホテルを会場に十月十八・十九日の両日にわたって行われた。

【理事会】

本協議会佐藤俊彦会長の挨拶に続き、協議に入った。

《佐藤会長あいさつ骨子》

三年前の福島大会から自身の意識が変わった。その理由は大きく次の三点である。

①テーマの変更・・・何でもありの協議会から、退職してからの生き様に焦点化され、すっきり、ストンと落ちた感がある。組織は人であり、同じ方向に向かつていきたい。

②昨年の岩手県木村先生の発表から・・・一歩前に出てよかったという発表であった。以来、「生きがい観」を合言葉にして秋田県を回らせていただいている。日常と非日常の区別がつかないほどの災害の中にあつて、できることに

情熱を燃やしていきたい。

③会長さんたちの動きⅡ連携プレー・・・会費と情報交換会の設定に関して、年一回の理事会を待たずに変更していくところは変更していくことができた。柔軟なフットワークに基づいたチーム力が大切である。やって定めなら改めるという姿勢が必要であり、各県の会長のご尽力に感謝したい。

はじめに、二十九・三十年度役員人事についての提案、確認がなされた。千葉昭東北会長の退任に伴い、後任の東北会長職には新たに秋田県会長となった佐藤俊彦氏が就任した。

また、山形県の大山明夫東北副会長の退任に伴い、山形県の佐藤利廣新山形県会長が東北副会長に就任した。なお、秋田県の佐藤会長が東北の会長となったことから、新たな東北副会長に秋田県副会長の高橋一郎氏が就任した。その後、各県推薦の理事・幹事を会長が委嘱した。

次に、次年度開催県である奈良年永青森県会長から、次年度の日程概要、協議会について提案がなされた。日程については、来年の十月十・十一日の両日に青森市で開催されることが提案された。また、協議会については引き続き今年度のものを継続したい旨が提案された。

青森県からは、二日目の情報交換会がなく

なり、朝食後解散との提案だったため、佐藤会長より、大会が実質一日目で終わることについての考えを各県会長に確認したい旨の意見が出された。各県会長からは、秋田県での明日の情報交換の状況を見た上で、という意見や参加費等の予算面を考えれば開催県の意向に添うのが妥当ではないかなどの意見が出された。概して開催県の意向に添ってはという意見が多く、佐藤会長はそれらの意見を了解した。結果、最終的に青森県の提案は了承された。

続いての各県からの提案案件では、青森県から理事会で提案され認められた基本計画が後日、変更になることは是非について提案がなされた。秋田県からは、今回の大会での日程変更は、前会長が各県会長に電話連絡し、その了解を取った上で踏み切ったものであること、また、そのフットワークの良さも踏襲していきたい旨の説明があった。

これに対して、各県より様々な意見が出されたが、東北地区退職校長会協議会会則第六条の「開催県が主管とし、開催県の会長が実務の責任者となる。」という文言を確認し、次年度の日程については青森県の意向に任せることが改めて理事会で承認された。なお、東北および秋田県会長である佐藤会長からは理事会で決定した内容についても、不測の事態等があれば、理事会後でも、各県の会長判断でフットワークよく事に当たってい

く体制は維持したい。このことについては本大会終了後に結論を出したいとの考えが述べられた。

【開会行事】

佐藤俊彦

会長、開催
県の高橋一
郎秋田県副
会長挨拶の
後、秋田県
教育委員会



米田進教育長および秋田市教育委員会佐藤孝哉教育長、秋田県小・中学校長会佐々木哲会長から祝辞をいただいた。それぞれの立場から秋田県・秋田市教育の現状や取組について紹介いただくとともに、秋田大会の充実と本協議会の発展を期待するお言葉をいただいた。金足農業高校野球部の甲子園大会での大活躍にふれながらの教育論について語られた佐藤会長、米田県教育長のお話も印象的であった。

【講話】

全国連合退職校長会常任理事三上裕三氏から「当面する全連退の活動について」と題して講話をいただいた。はじめに、初等中等教育局関連の来年度概算要求について話があった。概算要求のキーワードを「新学習指導要

領の円滑な実施」と「学校における働き方改革をめざすこと」とし、次の五点を概算要求主要事項とした。

①教育政策推進のための基盤整備
②夢と志を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力の育成

③生涯学び、活躍できる環境の整備

④誰もが社会の担い手となるための学びのセーフティネットの構築

⑤ Society 5.0 に向けた人材育成

次に組織拡大について話があった。会員数の減少に歯止めがきかない状況で平成二十一年～二十九年までの九年間で約七千人減少している。要因の一つとして「入会することのメリットを求める」などの価値観の多様化があると話された。今後も全連退の大きな課題であり、引き続き各都道府県での工夫をお願いしたい。

続いて国民の

祝日「教育の日」制定についてふれた。平成二十九年に教育再生実行会議で「教師の日」創設が議論されたが、全連退としては国民全体を主体として教育



振興を促す「教育の日」祝日制定に関する要望活動を今年度も十二月に行う予定である。最後に全連退発行の書籍「心を育てる学校の力」の情報提供があった。講話の締めとして三上先生も金足農業高校野球部の活躍にふれ、東北から日本や世界で活躍する有為な人材が生まれるよう全連退は学校の応援団として活動していきましようとの呼びかけがあった。

【話題提供および協議】

協議題「充実

した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」を受け、福島県からは震災、原発事故後の対応や浜通り支部、双葉支部の現状について情報提供があった。宮城県からは「幼・保・小・中・地域・行政の連携によるシンポジウムの実践を通して」の発表題で仙台支部から「仙台の教育を語る会」の取組について具体的な発表があった。最後に山形県からは、退職校長会活動はその人なりの生き方を尊重するということを基本にして取り組んでいる



東村山地区退職校長会の取組発表があった。

各県発表の概要

「さらなる復興を目指して」

～福島県公立学校退職校長会の取組～

福島県公立学校退職校長会

広報部長 二瓶 洋 允 氏

1 さらなる復興をめざして

原発事故による強制避難を余儀なくされ、浜通り支部会員も被災し、避難。そこからすべてが変わった。

平成二十四年六月、前年度中止となつた「会津大会」を開催し、会と教育環境の復旧・復興への決意を新たにす。

2 震災・原発事故後の対応

(1) 会員の情報収集・・・困難を極める。

(2) 平成二十三年事業計画の全面的な見直し

①事業計画と予算編成の見直し

「会津大会」の中止、被災支部・会員の会費免除、全連退会費免除、予算の縮減・経費節減の検討。

②支部会員の被災状況と避難状況の確認

○幸い死亡、行方不明、負傷会員は0名。しかし、県内避難二百七十六名、県外避難四十四名という現状。

③被災支部・会員・学校・児童生徒への支援

○総額六百万円を超える義援金（平成二十六年九月現在）

○被災小・中・高等学校（十四市町村）へ三百七十五万円の支援。

(3) 「ワンコインサポート事業」の展開

○自助・共助の精神・双葉の灯を消さないを合い言葉に教育環境復興・被災支部支援に。

(4) 「ぬくもり基金」の創設・運用

○秋田県退職校長会からの約百三十万円の義援金を基に創設。

(5) 県教育委員会との懇談会の開始

○心のケアのためのSCやSSWの増員等を要望。

3 浜通りの現在の状況

(1) 浜通り支部の状況

○双葉支部は依然厳しい状況。現在双葉地区に居住しているのは3名のみ。

○双葉支部広報紙「双風」（臨時版）及び『双葉の灯は消えない』の発行。

(2) 双葉支部内（双葉郡内）の学校の状況

○双葉八町村の児童生徒数の激減。
○学校再開や新設の動きはあるが、子どもたちがいない、戻らない、戻れないという現状あり。

4 まだ、先が見えない

○全国各地からの義援金や励ましによる支部活動や学校環境の復旧・復興への取り組みに感謝。しかし、汚染土、汚染水の問題や立ち入り禁止の看板が至

る所にある現状、今なお避難を続けている子どもたちの現状を考えれば、まだ先が見えないというのが現実。

○震災・原発事故から七年半、本会は新たな段階を迎えている。

「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」

～幼・小・中・地域・行政の連携によるシンポジウムの実践を通して～

宮城県退職校長会仙台支部研修部 菅 原 正 功 氏

一、はじめに

本事業は、本年度で三十八回を数える「幼・小・中・地域・行政の連携によるシンポジウム」で『みやぎ教育の日』推進事業の一つとして、協議題に迫る事業である。

二、事業の歴史と概要

昭和五十六年教育団体代表による教育懇談会としてスタート。その後一般参加者、シンポジウム形式で幅広く参加する会に発展。第二十九回から、基調提案を市教委担当課。幼・小・中・PTAの話題提供。第三十二回から「育ちを見守る」の主題継続。関係団体（市内私立幼稚園、小・中学校、PTA協議会、宮城教育振興会）の連携・協働・支援で実施。本年度は「見つめよう子どもの姿、育てよう子どもの心」の副題の下、約二百六十名の子育て関係者（現役保護者、保育士・教員・管理職、教育行政関係者、退職校長会会員）が

一同に「非認知的能力」をキーワードに開催。

三、本事業の特徴と企画・運営の工夫

【特徴】子どもを取り巻く様々な立場の市民が一同に会して話し合う貴重な場。地域が協働で子どもの育ちを見守り・支援するお手伝いの機会。本会ならではの活動。

【企画・運営の工夫】

- ①適切な主題の検討（不易と流行）
- ②参加者確保の工夫
- ③計画・実施・反省のサイクル化
- ④市教委と関係団体の全面協力
- ⑤話題提供者事前打合せによるキーワードの共有

⑥「概要版」配布によるシンポジウムのイメージ定着と参会意識高揚

四、成果と課題

【成果】永年の継続による市教委や関係機関との連携強化と教育力向上への寄与

- ①幅広い参加者の知恵や知識伝承の場
- ②教委施策や学校園・保護者の現状理解共有の場

【課題】

- ①参加型運営の一層の工夫
- ②参加者各層の割合のバランス等本会ならではの知恵と経験を生かし、仙台市の教育の充実と教育力向上支援の目標に向け、一層の寄与・貢献をしたいと考えている。

「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」

いかに活動を進めていくか

山形県退職校長会

東村山支部 水戸部 知之氏

地区の退職校長会の活動等は、充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資することをめざして多彩に進めてきたが、現実的には参加者が少なく、三割に満たない状況が続いている。

活動に魅力がないのだろうか、組織に未練がないからなのだろうか。それとも、日頃のかかわりが薄いせいなのだろうかといつも残念に思ってきた。この現実には、きつとこれまでも、そしてこれからも向き合わなければならない課題にまちがない。

軽トラで農作業に励む人もいる。頻繁に旅行に出かける人もいる。ゴルフ三昧で日焼けした顔にも出会う。退職後の生活は千差万別。それまでの生活から解放され、それぞれの生き方を歩んでいる。ゆつくりと、そしてゆったりと。

だからこそ、決して、無理を強いてはならないように感じる。価値を押し付けてはならないように思う。一人一人の価値観や生き方が違い、求めていることも「千差万別」なのだから。大切なことは、まず「その人なりの生き方を尊重すること」なのだと思う。

その意味では、むしろ、退職校長会は、退職した校長先生方の「立ち寄り処」、いや「居

酒屋」のような存在であっていいのかも知れない。ときどき、気が向いたら、ちよつと寄ってみようか、懐かしい誰かと語ってみようかと、立ち寄るような存在なのかも知れない。

そのように考えると、「三割弱の方しか」ではなく、「三割もの（大勢の）方が」何らかの活動に立ち寄ってくださっていることとらえることができるはず。いずれにしても大切なことは、「その人なりの生き方を尊重する」ことだと思う。

1. かかわりを大切にする
2. 魅力的な活動を求め続ける
3. 退職校長会存在の意義を果たす
4. できることをできる範囲で行う

【親睦懇親会】

県内の会員の皆様からも多数参加していただき盛大に開催された。

講師である三上先生のハーモニカ演奏も披露され、楽しい会となりました。

※二日目の【情報交換会】については十六ページ参照



郡市だより

Ⅱ 鹿角だよりⅡ

今年度の事業から

事務局長 吉 田 啓 一

○今年度の総会は五月二日、北教育事務所鹿角出張所の成田所長を始め、鹿角市・小坂町の両教育長、現職校長会对策委員長を来賓にお迎えし、三十八名の参加を得て開催した。

議事では、前年度会務・決算報告に続き、今年度の事業計画・予算案等が承認された。続いて役員改選があり、新会長に石井勲氏、副会長に吉成博雄氏が選出された。また、事務局長（吉田）、監事（田中忠美氏）も新たに選任されて審議を終えた。

総会後は、新入会員三名を歓迎する会が催された。宴は和やかに拡がり、終了予定時刻を大幅に超過する程の盛り上がりであった。

○九月七日は、第四十五回教育懇談会を現職校長会と共催で開催した。県退職校長会の佐藤俊彦会長をはじめ、五名の来賓の方をお迎えし、四十七名の参加となった。

教育講演会では、鹿角市先人顕彰館の小田嶋隆一館長をお迎えし『戊辰戦争 百五十年で想うこと』と題してご講演をいただいた。「戊辰戦争の中の南部藩」に視点をあてた歴史を学ぶ中で、先人の思いを垣間見ることができ、貴重な機会を得ることができた。

講演後の懇親会では、講師を囲み「戊辰の役」の話題で盛り上がった。

Ⅱ 大館北秋田だよりⅡ

実り多き研修会

事務局長 佐 藤 久 生

定例の研修会を十一月二十四日（土）、ホテルクラウンパレス秋北を会場に、会員七十一名の参加を得て開催した。現職の大館北秋田校長会副会長と大館市校長会会長の二名が来賓として参加した。研修会に先立って開会行事で、今年度めでたく傘寿（八十歳）を迎えられる四名に長寿者祝い品を贈った。

研修テーマ「心豊かに生きる道を求めて」のもと、二人の会員の実践発表を行った。

一人目は北秋田市の伊勢堂岱縄文館長でもある中嶋俊彦氏。「縄文の太古に想いを馳せるく伊勢堂岱遺跡に関わって」と題して発表いただいた。プロモーションビデオで遺跡の様子を映し、様々な特色（四つの環状列石や土偶群など）や自身の遺跡との関わりなどを発表してくれた。ユネスコ世界文化遺産候補に選定されているだけのものを感じた。

二人目は大館市の地元おさむの公民館長などをなさっている五十嵐おさむ経氏。「はてな映え写真」で綴る『真実のハチ公物語』と題して発表いただいた。今や世界的に有名になっている秋田犬、「ハチ」がなぜ有名になったか、今でも愛されているかなど、五十嵐氏本人が調べ、独自の考察を加えながら、エピソードを交えて様々な視点からお話された。

その後の懇親会では、さらに交流を深めた。

Ⅱ 能代市山本郡だよりⅡ

今年度の主な事業を振り返って

事務局長 佐 藤 敬 顕

○今年度の定期総会を四月二十六日に、北教育事務所山本出張所の佐藤俊之所長、能代山本市町教育委員会連合会の須藤幸紀会長、県退職校長会の佐藤俊彦副会長（現会長）、能代市山本郡校長会の秋元卓也会長を来賓に迎え、五十七名の会員の参加を得て開催した。新入会員八名の紹介の後、議事では前年度の会務・決算報告に続き今年度の事業計画案・予算案等について審議し、承認した。また、慶弔規定の一部改定案（「本人が死亡のとき、弔電及び香典を供する」）についても審議し、満場一致で承認した。なお、今年度の定期総会には60代会員の出席が例年になく多く、全体の参加者数を大きく押し上げることができたことは嬉しい限りである。

○定期総会終了後は、教育公務員弘済会秋田支部参事の川田浩三会員に講師をお願いし、「相続についてのお話」と題した研修会を行うことができた。参加者からは、相続税や遺産分割の基本的なことについて知ることができ、大変勉強になったとの声が多く聞かれた。○今年度も「地区世話人（34名）」の皆さんのご協力により、会報等の配付が滞りなく行われるとともに、会員の近況について随時、確認することができた。

〓 男鹿市だより 〓

主な事業を振り返って

事務局長 浅井 繁樹

〇総会・研修会・懇親会（五月五日）

今年度の会員数は六十名。研修会は、講師に男鹿市観光文化部観光課の五十嵐祐介氏を招いて、「寒風山の文化史」世界三景寒風山が浸透するまで」という演題でお話していただいた。内容は、大正2年、この地を訪れた地理学者の志賀重昂氏が寒風山の景観の素晴らしさを「世界三景の一つ」と語ったことが独り歩きし、そうあつて欲しいという地元の人々の願いが込められ、「世界三景・寒風山」という看板が立てられるまでのいきさつについてである。五十嵐氏は、大学院で歴史地理学を専攻し、市役所では文化財やジオパークを担当されているが、今回の講演内容は、現在、個人的に興味をもち研究していることであり、出席者は多様な視点から寒風山について理解を深める機会になった。

〇小松一夫先生瑞宝双光章受章祝賀会

本会の慶弔規定では、会員が教育功労で叙勲された場合、会が呼びかけて祝賀会を開催することになっている。今年度の春の叙勲で小松一夫氏が、瑞宝双光章を受賞した。これを祝う会が、本会主催で七月十六日、男鹿市民文化会館小ホールに男鹿市長をはじめとする参加者が出席し、盛大に催された。

〓 潟上市・南秋田郡だより 〓

総会・合同研修会について

事務局長 佐藤 信幸

〇総会・研修会 四月二十日

総会では役員改選が行われ、会長には渡部晟氏、副会長には伊藤薫氏と齊藤正博氏の二名が選出され新しい体制での活動がスタートしました。

研修会は、石井正氏を講師に「インターネットと人権」加害者にも被害者にもならないために」という演題で講話していただき好評でした。

〇合同教育懇談会 八月十八日

現職校長との合同教育懇談会では、井川町教育長の六郷博志氏から「地域と共にある新たな学校づくり」義務教育学校が目指すもの」という演題で義務教育学校ができるまでの経緯と課題について分かりやすくお話しいただきました。井川義務教育学校の三つの特色、六歳から十五歳までが一緒に生活、教科担任制を全校的に展開、「井川みらい学」というふるさと・キャリア教育のプログラム、これらを生かした学校づくりは現職・退職校長会両方の会員にとって有意義な講話となりました。

当会では、総会と合同教育懇談会が大きな事業ですが、これらの充実を図りながら、新たな事業を取り入れていきたいと考えています。

〓 秋田市だより 〓

今年度の主な事業を振り返って

事務局長 加賀美 俊一

今年度の「楽しい研修」は、体験型である「各駅停車を謳歌する旅」「酒蔵探訪」などを開催した。

十一月十日（土）に第二十六回目を迎えた現職・退職校長会教育懇談会が協働大町ビルを会場に開催された。来賓に秋田市教育委員会教育次長嶋崎公人氏をお迎えし祝辞をいただいた。懇談会は、「学校経営の活性化のために」一人一人の教員の「教師力」向上に向けてのテーマのもと、「教師文化の確かな継承に向けて」をグループ討議題とし、グループ協議を行った。初めに、退職校長会の研修担当よりグループ討議題の趣旨について説明があり、その後の各グループの話し合いは活発に行われた。教師文化の継承には、職員の実態を把握し、話ができる人間関係づくり等の校長の役割が不可欠であるとの意見が多く出された。

懇親会では、「秋田記念市民歌」の斉唱もあり、とても楽しく交流が深められ有意義な会となった。

当会では、現職・退職校長会教育懇談会が大きな事業の一つとなっている。懇談会の在り方について、現職校長会と連携しながら、内容の充実を図っていきたい。

Ⅱ 由利本荘・にかほだよりⅡ

退職・現職校長交流研修会から

事務局長 佐藤 清和

「第三十回退職・現職校長交流研修会」が十月六日（土）に鶴舞会館二階研修室に於いて、来賓四名をお迎えし、退職会員四十八名、現職校長十七名が参加して開催された。

研修会では、現職から、大内小学校長の本間光幸氏より「小・中学校の効果的な連携・接続を推進するための校長の在り方」の発表があった。急激に変化していく社会を生き抜く力を育むために、異校種間での連続性を意識した共通実践や地域及び他機関との繋がりを密にして効果を上げている取組である。本会でも、「これまで以上に学校の諸活動の応援を」との思いを強くした発表だった。

退職会員からは、佐藤俊介氏（元本荘北中学校）から「北前船とその時代」く本荘地域を中心にと題して、当地区の発展と北前船に関する発表があった。江戸時代から明治・大正時代の本荘由利の歴史と文化を、北前船を一つの手がかりとして研究を進めてきたものである。これまでの数々の調査をもとにした具体的な内容は、会員により深い理解と新たな関心を持たせてくれるものだった。

その後の懇親会では、現職との久しぶりの再会や会員同士の思い出、近況報告など、親好を深める一時を過ごすことができた。

Ⅱ 大曲仙北だよりⅡ

この一年

事務局長 小原 靖

総会（四月二十日）

出席者五十二名の総会だった。総会に続いての会員発表は、金子俊隆氏「言葉を構成する音と感性（アイヌの人達と私達の言葉）」と題しての講演だった。

総会終了後は祝賀会として叙勲者、新入会員と共に出席会員みんなで親睦を図った。

玉川先賢彰徳行事（九月一日）

玉川の酸性水除毒に貢献した先人の功績を長く世に伝えようと、現職校長会主催で退職校長会が共催で行っている研修行事だ。顕彰碑は神代抱返りにある。田沢湖芸術村ゆぽぽで神事を行い、引き続き懇親会を行った。戦前の業績に光を当てた、この行事の歴史や諸先輩の尽力に深く思いをいだいたひとときである。

研修親睦旅行（十月十一日）

今回は大仙西地区が当番になり開催された。大仙西地区を視察する研修は、「福乃友酒造」見学、「ナガイレーベン」（医療用等白衣工場）の新工場見学、自然環境を最優先に考えるプラスチック製品開発・製造工場「セーコン」見学、強首地区にある旧双葉小学校を改修した「大仙市アーカイブズ」見学であった。

懇親会は温泉ユメリアで盛り上がった。

Ⅱ 横手市だよりⅡ

県南教育懇談会開催

事務局長 石川 真須夫

今年度の県南教育懇談会は、現職校長会との合同研修会を兼ねて九月二十一日、横手市を会場に開催された。本会には秋田県退職校長会会長佐藤俊彦氏、秋田県教育庁南教育事務所長鈴木康氏にご臨席いただき、大曲・仙北、湯沢・雄勝退職校長会から八名の役員の皆さん、現職・退職校長会員七十名の出席をいただき盛大に開催することができた。

研修会では、須田宏氏（大曲工業高等学校 博士号教員）から、「第五十九次日本南極地域観測隊（夏隊）に同行して」と題してご講演をいただいた。南極観測隊員に応募するきっかけとなった経緯。採用が決まってから南極へ行くまでの訓練。第五十九次隊の特別なミッション。南極での観測と活動。そして現地からの授業等についてビデオ放映を交えて詳しくお話を聞くことができた。

その後の懇親会には、横手市教育委員会教育長伊藤孝俊氏にもご出席いただき、それぞれの地区の活動の様子について語り合うことで友好を深めることが出来た一日となった。

Ⅱ 湯沢雄勝だより Ⅱ

萌友会この一年

事務局長 滑 川 道 彦

湯沢雄勝退職校長会「萌友会」は、今年度
結成四十年となった。会では総会、親睦レク
リエーション、現職との合同研修会、会報「萌
友」発行の四事業を実施した。総会では六名
の新会員を迎え、会終了後に行われた歓迎会
は大いに盛り上がった。現職との合同研修会
にも多くの参加があり盛会だった。親睦レク
リエーションは、文化系と体育系の2コース
に別れて実施した。文化系は「のんびり歴史
散歩」というタイトルで、旧高松小学校校舍
を活用した「湯沢市郷土資料学習展示施設・
ジオスタ☆ゆざわ」の見学をした。地元にあ
る施設だが初めて訪れたという参加者が多
かった。体育系は湯沢市パークゴルフ場での
パークゴルフに汗を流した。数日前の台風に
よる倒木で使えないコースがあったため、無
料で開放してもらった。コース2周の18ホー
ル。和やかな雰囲気の中、時間いっぱい楽し
むことができた。ちなみに MVP に輝いたの
はスキー全日本チャンピオン以来の金メダル
を獲得した G 先生、百均の金メダルに大感激
していただいた。夕方の合同懇親会も盛んで、
心も体もリフレッシュした半日を過ごすこと
ができた。会報「萌友」に掲載される会員か
らの短信は毎回好評を得ている。今後も会員
の繋がりを大事にして活動していきたい。

会員のご逝去

(敬称略) 心からご冥福をお祈りいたします。

(91号以降)

氏 名	年 月 日	住 所	氏 名	年 月 日	住 所
工藤 繁	30・7・22	大館市有浦六丁目	工藤 利男	30・10・28	由利本荘市大鍛町
仲谷 安夫	30・8・18	北秋田市今泉字大堤下	(正六位)		
澤口 禮二	30・10・1	大館市字桜町南	佐々木 哲	31・1・8	由利本荘市御門
亀山 恵子	30・10・3	北秋田市花園町	藤原初太郎	30・7・24	大仙市大曲日の出町
花田 保男	30・10・26	北秋田市宮前町	西宮 陽助	30・9・14	仙北市角館町歩行町
石川 敬一	30・12・9	北秋田市伊勢町	藤原 健造	30・10・14	仙北市角館町西長野
庄司 博信	30・12・30	大館市字観音堂	櫻田 武男	30・10・31	大仙市刈和野字清光院後
石岡 満夫	30・7・15	藤里町大沢字館の下	(正六位)		
石岡 庄貞	30・8・19	能代市寿域長根	佐々木昭元	30・11・13	大仙市神宮寺字神宮寺
小熊 藤藏	30・12・21	秋田市広面字樋口	鈴木 樹	30・12・13	大仙市大花町
福山 昭二	30・12・30	能代市昭南町	(従六位)		
結城 郁郎	30・10・6	男鹿市船川港船川	進藤 造一	31・1・13	大仙市協和荒川
天野 幹男	30・10・22	男鹿市脇本脇本	高橋 卓司	31・1・16	大仙市佐野町
三浦 光朗	30・10・28	潟上市飯田川和田妹川	高橋 恒二	31・1・28	美郷町
加藤 昌弘	30・7・30	秋田市広面	和賀 昭二	30・10・21	横手市本町
佐々木信吉	30・10・1	秋田市千秋城下町	小西 保明	30・11・5	横手市雄物川町
鈴木 弘	30・10・16	秋田市手形	木村 隆	30・12・12	横手市平城町
渡辺 昭次	31・1・30	秋田市寺内蛭根	和田 久助	30・11・1	湯沢市愛宕町
佐藤 正治	30・6・29	由利本荘市御門	中野 正	30・12・26	湯沢市川連町
(正六位瑞宝双光章)			大沼 保夫	31・1・28	湯沢市清水町
佐々木貫三	30・7・17	由利本荘市東町			
中村 定次	30・8・10	由利本荘市二番堰			

会員寄稿

じわり生きがい

このひととき

「退職後の一年目」



鹿角

田中 節夫

退職したら何をしようかと思案に暮れていた一年前だったが現在では再任用制度を活用し、生徒の直接指導にあたっている。

教諭の立場としての指導は約二十年ぶりで当初は随分と苦労した。教育目標達成のために諸施策を打ち出してきたこれまでとは打って変わり、目の前の生徒に直接指導を施すことに相応の時間を要した。それでも以前の様相を思い出しながら、また、同僚に教えを請いながらの日々の繰り返しの中で徐々に勘を取り戻すことができた・・・？ 私が新任の頃、「習うより慣れろ」と諸先輩から異口同音に手ほどきされたが、まさしくその路線を地でいくこととなった。

今、この一年を振り返ると様々な思いが脳裏をよぎる。生徒がもっている純粹さや素直さは何ら変わっていないし、私との年齢差からくる垣根を取り払って接すれば、生徒は一人の大人、一人の先生という対応をしてくれ

る。私は若い頃に比べ、先にある生徒の姿を想定した指導支援を心がけるようになった。数年後に必ず訪れるであろう社会の形成者に必要な素養を育み、然るべき場面で力を発揮できる社会人の育成を強く意識するようになった。

生徒を取り巻く環境の厳しさは否めない。情報媒体等の激変など、人にとっては便利なのはツールが皮肉にも生活しにくい環境を作り出している。この障害を乗り越え、より人間らしい生活を主体的に営むことができる力の植え付けが喫緊の課題と感じている。

さて、私の一年後はどうなっているのだろう。人間らしく過ごしたいと思っではいるのだが・・・。

(平成三十年三月退職)

ふるさとの河



大館北秋田

佐藤 和博

“おさるべ川たんけん隊”も夏の風物詩になってきた。これは「地域を流れる清流に、誰もいないのは寂しいし、もったいない。子どもも大人も、ふるさとの自然にとっぷりつかって楽しもう」と始められた活動で、当会の会員の方も数名参加しておられる。

流れてみたり泳いだり、イカダに乗ったり

落ちたり、びくびくツとする魚の命を感じたり、ボディペインティングに水切りと、川に子どもたちの歓声がひびきわたる。天真爛漫な子どもたちの姿と、「楽しかったなあ」という大人たちの一言が全てを物語っている。この日はかりは、子どもたちのゲームの虫も、はい出すスキがない。

そして秋の観察会。この川で生まれた鮭は、海に出てカナダ沖まで旅をして四、五年かけて帰って来るとのこと。あちこち傷ついてボロボロになった体でふるさとに帰り、産卵する鮭たちをみて、がんばれの声があがる。命の不思議や壮絶さ、共感・・・子どもたちは、何を感じたのだろうか。今年は八匹の鮭が見られた。

しかし、この楽しい時間と感動を与えてくれたふるさとの河は、水中メガネで覗いてみると、半世紀前の姿とはまるで違っていた。魚が群れ躍動していた豊かさがまるで感じられないのである。大騒ぎの中のこのギャップ。五十年後の豊かな川を目ざして、何かできることはないか。

将来大人になった子どもたちは、“ふるさと”という言葉で何を思いうかべるだろうか。その思い出の片隅に、仲間たち、川遊び、火まつり、地域の人たちとの温かいふれあいなどが残っていたら嬉しい限りです。

(平成二十六年三月退職)

「世俗雑感・小さな生きがい」



能代市山本郡

浅野 士郎

私は今年六回目の年男となります。年賀状にはうっかり十二回目と印刷してしまいました。干支の支と回数の数字を呆けた脳が逆にしてしまったのです。なんと倍のサバ読みです。願わくは受けた方が「あーもうそうなたか」と流してくれることを期待して…。今年の干支は己亥（つちのとい）、己は土に、亥は水に関係があるそうです。昨年は土と水の関係した自然災害が多くありました。今年はこれらが幸いとなる年でありたいと願います。

昨年は県民が大きな幸せを感じた出来事がありました。誰もが喝采を挙げたことなので再掲はしませんが、まさに勤労感謝ならぬ金農感謝でありました。公立・地元・少数でもこれに努力・チームワーク・一心不乱が真つ直ぐに加われればこんなことが起こるのですね。どのくらいの運が関係したかはチームが自ら引き寄せたものとしてももちろん天が認めたものでしょう。このように天の加勢を得ている若いアスリートたちがわが国にはたくさんいます。なんともうれしい限りです。

私の屋敷内には多くは厄介と思われるであろう竹がそこかしこに繁茂しています。種類はヤダケとシノダケと思われれます。それら

は我が世を得たりと隙間なく生え後方の景色を遮断します。退職後この竹藪に興味を感じました。古株を剪定すると結構見栄えがするのです。また春にはタケノコが生命力を噴出、それがなかなかの美味なのです。さらにはそれらの細工にも挑戦可能です。老人病の手の震えを上手く活用すればおもしろいものができるかも！これがもしかしたら私の小さな生きがいになるかもしれません。

本題はどこへやら…、ご容赦ください。

（平成二十年三月退職）

「旅」を三鉄とともに楽しむ



男鹿市

西村 彰

退職後には何をしようかと漠然とした意識しかなかった。おそらく、旅行でもしようかなくらいにしか考えていなかったように思う。いろいろな所に行ってみたいと思っていた。一つの目標として、日本全国の都道府県に行ってみたいと思っていた。在職中は社会科の授業の参考にでもなればと数少ない機会に各地を巡ったが、まだ訪れたことのない県がいくつもある。しかしながら、訪れようと意欲のわかない県もある。しかも、何度でも訪れたい所もある。そのせいかなかなかすべての都道府県を訪れることができないでい

る。

最近はいわゆる「撮り鉄」、「乗り鉄」、「呑み鉄」にも興味がある。先日にも本州最北端の場所にリュック一つ背負って鉄道を乗り継いで行ってみた。時間のない時には交通手段は限られているが、時間に余裕がある時にはいろいろな鉄道に乗って車窓を楽しみながら出かけるのも悪くないと思うし、乗り換え時間を過ごしたり違う路線に乗ったりするのも結構楽しいものである。乗り換え方法や乗り換え時間の過ごし方を調べたり考えたりするのも老化防止になるのではないかと思う。

このようにリュック一つ背負って旅行に出かけるのも悪くないと思っている。いろいろな場所を訪れるときに、この「撮り鉄」、「乗り鉄」、「呑み鉄」をうまく組み合わせられたらいいと思う。しかしながら自分に合っているのは、「乗り鉄」か「呑み鉄」だと思う。「撮り鉄」は、ホームに入線している電車を撮るのが精一杯だからである。

いろいろな交通手段を利用し、「撮り鉄」、「乗り鉄」、「呑み鉄」を楽しみながら全ての都道府県を訪れるのが当面の目標である。

（平成二十九年三月退職）



「むのたけじの声が聞こえる」


 潟上市・南秋田郡
鍋島 蓉子

四十五年？も前のことである。山王中学校の体育館で、むのたけじの講演会があった。私はそれまでむのたけじを知ってたろうか。会場をびっしり埋めた教職員にむのは叫んだ。「先生たちが子どもの味方にならないで、誰になるか。子どもたちにとって今は、親さえも敵になってしまったのだ。」

荒れる中学校と言われた時代、その波が秋田にも押し寄せた頃だった。彼のあの叫びは以来胸底に住みついた。新聞などで「むのたけじ」を目にすると、あの叫びが蘇った。高学年の学級運営に悩んだ時も、そうだった。

二〇一三年飯田川公民館で、講演会「むのたけじが吼える／今の憲法でなぜ悪い」を潟上九条の会主催で開いた。歩く時は息子さんに支えられての九十八歳のむのさんだったが、講演となれば背筋をしゃんと伸ばし、大きな声で時に吼え演台を叩いた。こちらの予想を超えた多くの聴衆は、「九条を壊すな」「平和が一番だ」の熱い語りに、身を乗り出した。三年後、むのさんは一〇一才で亡くなった。

去年十月末、映画「笑う101歳×2

笹本恒子・むのたけじ」を潟上市で上映することが出来た。以前秋田市でその映画を見た私たちは、我が市でも上映したいと話し合っ

たのだ。市民から信頼の厚い四人の方々の協力を得て「上映する会」を立ち上げた。私に役に立つならと元教育長である退校会の大先輩が、会の代表を引き受けてくれた。代表始め四人の名前を上映チラシに載せる事が出来たお陰で、市や市教委等三団体からの後援も受けられた。当日二三人の入場者数は、協力を頂いた人々の繋がりのおかげだった。むのさんのあの声を、今も時々聞く。

(平成十七年三月退職)

次こそ


 秋田市
大野 進

退職してからも趣味の魚釣りを楽しんでいます。私の釣りは小学二年生の時に千秋公園のお堀で小さなゴリを釣ったことから始まり中学生になると自転車で数時間かけて海まで行き、鯖や鰯など魚屋に並ぶ魚が釣れて興奮したものでした。車を持つと釣り場が広がり、県内の海だけでなく、酒田沖の飛島や佐渡島の磯場で鯛を狙いました。磯釣りは重い荷物を背負って岩場を移動しますが、年齢を重ねると次第に億劫になってきました。

ある日、船釣りに誘われ、運良く真鯛の大海物を釣り上げることができました。それをきっかけに船釣りに夢中になり、週末に海が風

の時は欠かさず出かけています。ターゲットは時期によって真鯛やソイ、ハタ、ノドグロ、ブリ、サワラ、ヤリイカなどに替わりますが、本命は夏場に黒潮に乗って飛島周辺に回遊してくる黒鯛です。店頭では本鯛として売られている高級魚です。私が狙うのは大きくても五十kgほどで、それ以上だと釣り上げが困難で、持ち帰りも大変なので敬遠しています。さも釣っているかのようなですが、めったに釣れません。過去五年間で釣ったのは、三十kgちよつとのサイズが二本だけです。

釣りは自然相手なので、鯛以外の魚でも全く釣れないことが普通にあります。妻からは買った方が安上がりによく言われます。しかし、大海原でイルカの大群に囲まれたり、鯨やオットセイを発見して興奮したり、通りかかった客船を見て、家族旅行を思い出したりと、副次的な楽しみも多々あります。

帰港中に正面に見える鳥海山は雄大で、貧果をなぐさめてくれます。次は釣らせて、と心の中で手を合わせるのは毎度のことです。

(平成二十七年三月退職)



孫と宿題と



由利本荘・にかほ

安倍 武義

孫は男の子で、現在小学三年生である。放課後は、親が仕事を終えて迎えに来るまで、我が家で過ごす。妻は、その間に宿題を終えさせたいのだが、そうはいかない。

宿題に向かわせようとする、「お腹すいた」とか、「トイレ」などと言いつつ、やつと宿題に向かつて、突然鼻穴をくじりだしたり指を噛んだりする。そうすると、心、ここにあらずである。私の声も妻の声も耳に入らない。我に返ったときは、今、どこをやっていたのか分からなくなっている。その上思いつくと、宿題に関係の無いことでも話し始める。ある時、漢字の書き取りの『等しい』と書く欄に『人しい』と書くようにしていた。ある時は算数の文章題の回答欄に、正直に『分かりません』と書いていた。

そんなこんなで宿題を終えるのに、二時間近くかかる時がある。私が、「三年生の宿題は、四十分で終えないか」と言うと、「六年生は？」ときた。「六年生は二時間！」に、「六年生はうらやましい」とくる。

そうした孫に対し、勉強は苦しいものと考え妻の、毎回、機銃掃射のごとき叱咤・小言である。学習を楽しいものとする私は、妻の叱咤・小言から孫を守る盾となる。

孫のやる気を引き出すにはどんな言葉かけがいいか、自信を持たせるにはどうしたらいいか、根気と工夫の連続である。現職の時に、孫に接すると同じように子どもたちにかけていたらと、反省させられる。子どもへの接し方や教え方など、孫に学ぶことは多い。

あるとき、孫が言った。

「じっちゃん。三年峠、あればいいね。三年峠で転んだら、長生きできるのに。」

(平成二十二年三月退職)

言葉の考古楽



大曲仙北

金子 俊隆

常日頃使っている言葉は、最初どんな意味を持つて生まれたのだろう。

現在、私は、アイヌ語に残る古い音を頼りに、そんな課題に取り組んでいます。

それは、仙北市にあるアイヌ語地名と言われる内(ナイ)の付く地名等を調べていく中で「アイヌ語は、外国語ではなく日本語の古い音でできている」と気がついたことから始まりました。

アイヌ語には、古い発音である唇音や無声音がふんだんに使われています。また、私達と同じ言葉や似たような言葉も多数あります。

さらにラッキーなことに、私は、秋田弁を話しますし、私の暮らす仙北市は、かつてマタギの暮らす土地でもありました。

アイヌ語には、秋田弁と同じ言葉があります。また、マタギ言葉(山言葉)は、古いアイヌ語でできています。

そして、驚いたことに、東北に留まらず全国にある地名や共通語も、古い音に戻すと、本来の意味が見えてくるのです。

現在の言葉は、それを構成する元々あった音が部分的に別の音に変わったり消えてしまったりしてコンパクトになっています。

それを、タイムマシンで過去に遡るように古い音に戻していくのです。

例 しつける(仕付ける・躾ける)の古い音 シト。クケルウエ(子供を育てること)

ト。はツへと変化し、小さい文字「ク・エ」は強く発音されない音で消えていきます。

今後機会がありましたら、皆さんにも、言葉が生まれたとき持つていた意味について、お伝えできればと思っています。

地名や方言は、言葉のタイムカプセルです。

(平成二十七年三月退職)



不安を抱えながらも早 1 年



横手市

酒井 浩

退職前から悩んでいた。お願いして、再雇用していただくかどうかということ。しかし、退職の日が近づくにつれ、その迷いも薄れてきた。「退職したら、思う存分、自分のやりたいことをやろう。」と。まずは、現職時代、行きたくても行けなかったところに。その地は小笠原諸島である。オフシーズンには、船便が 1 週間に 1 便のみ。しかも片道 1000 キロ。24 時間の船旅である。4 月に入ってすぐに実現できた。父島と母島のトレッキング、希少生物との出会い、ガジユマル林でのターザンごっこなど生涯忘れられない旅を満喫できた。問題は、その後である。正直不安であった（今も不安だが）。はたして、自分のやりたいことが本当にできるものだろうか・・・ほどなくチャンスは訪れた。自分のフィールドとしている真人（まこと）山での自然観察会や案内依頼が続いた。横手市の主に退職理科教員らで作る「わくわく科学工房」に現職時代から所属していたこともあり、実験講座や実験ショーの機会もいただいた。思い切つて、地域の読み聞かせボランティアサークルにも入り、図書館での読み聞かせ活動やイベントにも合流できた。4 月以降、時間さえあれば真人山に通い続けたこともあ

り、そこで記録した写真を私がお世話になっている増田地区交流センターでの環境講演会で発表できる機会もいただいた。まもなく退職して 1 年が過ぎようとしている。相変わらず、この先やっていけるかどうかの不安は消えないが、何とか今年以上の成果を目指して歩んでいきたいものだとは願っている。

(平成三十年三月退職)

楽しくとりくむ地域文化の伝承



湯沢雄勝

藤原 隆平

一昨年、秋田市の太平山に旭又口から往復コースで登った。学生時代以来五十六年振りのことだったので、感慨深い一日となった。

コース途中の御手洗の池に、江戸時代後期の紀行家「菅江真澄」一行が太平山参りの下山途中に通ったという標柱（菅江真澄の道）がある。やや傾いた柱の文字を撫でながら、現代とは違い難渋をしながら歩き続けた真澄の信念と意欲の凄さに改めて敬服させられた。

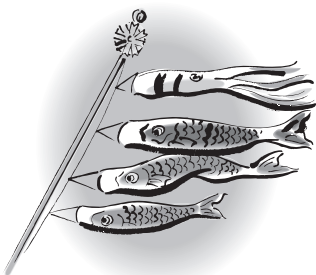
さて、私の地域では、地元の文化遺産を守り伝え、地域の皆さんの心の支えになったり、また、観光資源として地域興しにもつなげた^{さと}いの思いから、「松岡平安の郷史跡保存会」

を立ち上げて活動している。

嘗^{かつて}、当地は平安時代の宮道の一つだったよう^うで、平安時代の作とされる仏像（県指定）や岩手平泉と関係が深い経塚・経筒（県指定）、白山神社などがあることから、これらを元に四年前に映画化し、DVD にして提供している。そして、一昨年には、もう一度真澄に光を当てようと、「菅江真澄と湯沢」講演会を開催し、昨年は市の提案型補助事業に応募して、真澄が歩いたという今は使用されていない古道の整備をすることができた。そして今年^うは、市内各地の「真澄の道を巡る合同のツアー」を実現させたいと楽しみにしている。

当史跡保存会の九十歳近い最高齢の会員から「地域の歴史を知り、その保存や活用を語り合うと、やりたいことが浮かんできてとてもうれしい。ワクワクするね。」との言葉を聞いて、会員は勿論、地域の人々にとっても大きな力となり、夢のある地域づくりに繋がればと、会の一員である自分にも活動の夢が膨らんでくる。

(平成十二年三月退職)



祝叙勲

おめでとうございます

(順不同・敬称略)

(氏名・現住所・功労・種類・受章日の順)

畠山 清輝・大館市字相染沢中袋

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・7・1)

近藤 正・北秋田市栄字中綱

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・10・1)

山岡多郎右工門・北秋田市鎌沢字雪田家の後

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・11・1)

乳井 昭三・大館市小館花字萩野台

高齡者叙勲・瑞宝双光章(31・1・1)

小野 修夫・男鹿市船川港船川字鳥屋場

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・10・20)

中村 隆・男鹿市船越字杉山

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・12・27)

加藤 豪之助・秋田市柳田

教育功労・瑞宝双光章(30・11・3)

堀江 剛弘・由利本荘市西目町沼田字新道下

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・7・1)

高橋 富美雄・大仙市朝日町

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・7・1)

高橋 良三・大仙市神宮寺字神宮寺

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・7・1)

三浦 憲一・大仙市花館中町

教育功労・瑞宝双光章(30・11・3)

鈴木 樹・大仙市大花町

高齡者叙勲・瑞宝双光章(30・12・1)

【東北情報交換会概要】

初めに各県が抱えている課題について、各県より五分程度説明があった。

《東北各県が提示した課題》

青森県…新規退職者の入会率の向上

岩手県…外出が不可能な高齢の方への対応

宮城県…会員数の減少

福島県…会員の拡大と支部活動のさらなる活性化

山形県…①効果的な広報活動②予算執行の工夫③学校の支援の在り方

秋田県…現職校長の支援・応援の在り方

その後、右記の各県現状を踏まえて

①会員数の減少と入会率の向上

②現職教員への支援の在り方

③会および会員の活性化のための手立て

の三点について意見が交換された。入会率と加入率の違いや会費の徴収方法、退職校長会の存在意義などについて、活発な情報交換がなされた。

最後に、本大会の講師である全連退常任理事三上裕三氏から、大変活発な情報交換会であったことへの賛辞と東京都やご自身が住んでおられる埼玉県の取り組みなどが紹介された。さらには、退職校長会の存在意義は何かをしつかり受けとめ、見直すところは見直さなければならぬ。また、退職校長会として、国や関係団体に発信していかなければならないという言葉で締め

くくられた。

様々な意見

が出され活発

な会となりま

した。すべて

は掲載できま

せんが、本退

職校長会の存

在意義を改め

て問い直す大

会になったと

強く感じております。



【あとがき】

会報九十二号をお届けします。本号は、今年度秋田県で東北大会が開催されたことから、それに多くの紙面を使わせていただきました。

事務局を中心に準備を進めましたが、六年前と会場も異なり不安要素も多々ありました。

それでも、他県の皆様から頂戴した感謝の手紙等を拝見し、成功裏の内に終えることができた大会であったと改めて実感しております。

これも県内各地からご参加いただいた会員の皆様のご協力があったること、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。